

れてしまうわけで、編入して間もない生徒たちが「前の学校に帰りたい」と訴えるのは、当然と言えるでしょう。「親の都合で」自分の生活が翻弄されているように感じたとしても無理はありません。ただでさえ親に反抗したくなる反抗期、それだけでなく悩みの多い思春期ということになると、子どもたちの心は二重、三重の混乱の中に投げ込まれてしまうことになります。

一方、親の方はどうかというと、ふるさとの日本へ帰ってきたということで、どこか安心してしまい、子どもの苦しみが想像できないことがあります。子どもたちの心の状態はそれどころではないのに、やれ進学は、大学は、ということばかりが気にかかって、子どもとの間に溝を作ってしまうケースが、少なくありません。

海外での生活を始めるときには、子どもたちの生活を安定させるために親は多くのエネルギーを使います。両親そろって学校を見に行ったり、家族総出で宿題に取り組んだりします。学校で授業中にどんな活動ができているか、友だちができたか、何か困っていることはないかなどに気を配ります。

ところが、日本に帰国したとき、子どもにとっては、ある意味で海外で生活を始める時よりもっと大変かもしれないのに、親の方はそれほど注意を払わない傾向があります。特に父親のコミットメントがなくなってしまうがちなのが問題です。家庭がしっかりしていれば、苦しい時期は乗り越えられるのです。

中学で帰国した子が高校生になると、自分の海外体験を振り返り、「貴重な体験だった」と受け止められるようになります。苦労した体験を客観的に評価できるようになるまでには、時間が必要なのです。海外での体験をほんとうに「よかった」と思えるようにするためには、子どもの悩みにしっかりつき合いながら、長い目で成長を見守っていく必要があります。

* * *

考えてみれば、海外で生活しない子どもたちにしても、「海外に行かない」ことを自分で選んだわけではありません。海外生活以外にも、いろいろな家族の冒険があり、困難があります。子どもに負担をかけることで親が負い目を感じるよりも、家族が力を合わせてたいへんさを積極的に受け入れていくことが大切です。そして、帰国した時には、海外へ行った時以上に子どもたちの心に注意をはらい、悩みを



理解するように努めなければならないと言えるでしょう。山下先生は、「時間はかかるけど、みんなたいへんさを乗り越えるから大丈夫。」と言います。その時間はどれくらいかときいたら、平然と、「もちろん人によるけど、4年半が一つの目安かな」と答えました。先生がなかなか成果が見えて来ない生徒にも実に根気よくつき合っているのは、子どもを育てるのは時間のかかる仕事だということ、そして、誠実に子どもに向き合っていれば、その努力はいつか必ず報われることを、経験を通して、身にしみて知っているからにちがいません。

私の息子は中1を終えた時にアメリカに移り、ハイスクール卒業まで過ごしました。彼は、海外生活で最もラッキーだったことの一つは、「親が自分のために多くの時間を使ってくれたこと」だと言っています。

(注1)「取り出し」：帰国生で日本語の力が弱いなどの理由で、ホームルームの授業と一緒に参加することが難しい場合に、ホームルームとは別の場所で、別の教師がその科目を指導すること。啓明学園では、そのための教室を「国際学級」と呼んでいます。

* * *

このコーナーへのご意見、ご質問、とりあげてほしい話題のご希望などをお待ちしています。Eメールで、sasa@keimei.ac.jp まで、お気軽にどうぞ。

編集長から一言

この佐々先生のレポート、帰国直前のご両親にしっかり読んでもらいたい内容です。

私は、「数年海外で暮らした子どもにとっては日本帰国ではなく、『日本移住』だとの認識を、保護者、特にお母さんに持ってもらいたい」と、いつもカウンセリングで言っています。それでも、解らないお母さんには「帰国後の不適応の最大の原因は、海外での生活を忘れてしまったお母さん」と断言します。

異文化適応の研究では、自文化への再適応が大きなテーマです。アメリカ人の友人は、「ドイツに1年行ったときよりも、アメリカに帰ってきたときのショックが大きく、医者にかかった」そうです。